

平和克復と秋の文展

黒田清輝

今年は例年より文展の発表が早いやうだが、一日でも早ければそれ丈畫家の氣分が緊張するから結構である。米國の友人から向ふでは平和の歡びを現はす凱旋門其他の趣向は總て美術家にやらしてゐると云つて來たが、我國では假令そんな企があつても畫家に依頼する事もなし、同じ平和來にした處で英、佛、米の畫家等が直接に感受した衝動とは餘程異つた感じ方であらうから、今秋の文展に特に平和を象徴すると云ふものは出まいと思ふ。併し佛蘭西は奈翁時代には一般の畫風が古典的に傾き、東洋との交通を開始した時には明るい畫風に向いて來たやうに何時の時代も歴史に伴ふた變化があり殊に洋畫のやうに世界的なものは思想界の推移に左右されるので、戦前は我國でも舊い型を脱した新しい試みが全盛を示したが、其後も引續き思想の混亂期にある一方、若い畫家連は減法もなく騰つたモデル賃や五十號の畫布が八九圓もする上に、去年に劣らぬ繪具高と云ふ不安に併せ、生活難に脅かされてゐると、戦争が齎した人類の不幸とが原因をなして多少秩序立つた畫風の中に一體に眞面目さが加味され深刻な藝術界に進みつゝある傾向があると思ふ斯の傾向の洗練されたものが聽ては世界に對して誇るべき大藝術となり得るので、今年の文展を飾る洋畫は一面我思想界推移の表現とも見る事が出來やう。(やまと)